



Title	人間科学的アプローチとは何か
Author(s)	大前, 玲子
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2011, 37, p. 135-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間科学的アプローチとは何か

大前 玲子

目 次

1. はじめに
2. 人間科学的アプローチの実際
3. 考察
4. おわりに

人間科学的アプローチとは何か

大前 玲子

I. はじめに

「人間科学的アプローチ」について考えるためにまず、「人間科学とは何か」という問いかけをすることから始める。

1. 「人間科学」の歴史

「人間科学」の歴史的流れを徳永（1989）は「ほぼ現今の意味での科学概念に基づき、人間を対象とする『人間科学』を構想したのは、サン・シモンの『人間科学の覚え書き』（1813）であろうか。彼は基本的にはデカルト的な心身二元論を受け継ぎながらも、想像に基づく推量ではなく、事実の観察と合理的推論に基づく方法を人間に適用し、生理学と心理学を二本の柱とする『人間科学』を構想した。」としている。その後、ドイツでは精神科学や文化科学という名称が使われ「人間科学」という語は使われなくなる。一方フランスでは、サン・シモンからの流れは受け継がれ、1950年代フランスでは、人間を人間としてトータルに解明しようとする一群の学問分野の総称として「Sciences Humaines（人間科学）」という用語が定着しつつあり、急速に広まった。（シュトラッサー、1962）その領域は、ピアジェ（1970）によると「人文・社会科学から自然科学に連なる」領域にまたがっている、としている。

1972年、「人間科学」という名称の学部が日本で初めて大阪大学に誕生した。人間をめぐる多様な問題に取り組もうとする時代の要請に答えて、既成の学問分野にこだわらない「学際性」・「文理融合」・「総合的な人間理解」を理念に、文学部の心理学・社会学・教育学から独立し、新しい学問空間を提供する学部が登場した。その後、「人間科学」という名称の学部を持つ大学が急速に増加し、多くの卒業生を輩出している。

2. 「学際性」

「人間科学的アプローチ」とは個別学問分野が「総合的」で「間をつなぐ」視点を持ち、新しいタイプの学問的空間を見つけていくことであると考えられる。人間科学では、いろいろな立場の学問が入ってきて、それらが一緒になって学際でやることになるからである。

青木（1992）は、人間科学というのは、「統合ではないけれど総合的なこれまで他の

学部では必ずしも行えなかったいろんな学問をするときの束としての名称。」とし、「それぞれの個別専門を持ちながらその周辺領域との『間をつないでいく。』」としている。

徳永（1989）も人間科学についての通念は、「諸科学は専門化のあまり、人間の全体像を失ってしまった。人間科学はそれを回復しようとする総合化の要求から起こり、方法的には同一の領域も複数の接近を許す人間科学に関する方法的多元論であり、従来の学問領域にこだわらずに境界領域を相互承認する『学際性』を目指している。」としている。

筆者が経験した学際的研究として「学校の心理臨床」と「イメージ表現における認知物語療法」がある。前者は本論文において述べることにするが、後者は、個別学問というよりもっとせまく「学派の学際性」についての研究である。後者は紙数の関係で、詳細は拙著「箱庭による認知物語療法」（2010）を参照していただくこととして、また別の機会に考察することにする。

II. 人間科学的アプローチの実際

1. 目的

本論の目的は、まず、筆者が経験した「学校の心理臨床」がどのようなものであったかを報告し、それらが、個別学問分野の「間をつなぐ」・「総合的」視点をもつ学際的な「人間科学的アプローチ」の研究であることを示すことである。

ここでの「学校の心理臨床」とは、筆者が「教育研究所」と「学校」という教育現場で体験した臨床心理学的アプローチについてである。

2. 学校の心理臨床

筆者は、大学を卒業後すぐに、公立の教育研究所の教育相談係として十年あまりカウンセリングやプレイセラピーなどの心理臨床の仕事をしていた。その後、同じ教育委員会に属する小学校の教員として十数年、教育実践の中に臨床心理学的なアプローチを取り入れた「心理療法の視点を取り入れた学級経営」を実践していた。その後中学・高等学校のスクールカウンセラーになり七年以上経過している。これらの筆者の体験から①教育研究所での心理臨床②心理療法の視点を取り入れた学級経営（Psychotherapeutic Class Management）③スクールカウンセラーとして学校内でのカウンセリング、という3通りの「学校の心理臨床」のケースを記載する。

表 1 学校の心理臨床

学校の心理臨床	実践現場	立場	学問領域
①教育研究所での心理臨床	地域の教育 研究所	教育相談係 (カウンセ ラー)	臨床心理学(専門) 社会教育学 教育社会学
②心理療法の視点を取り入れた 学級経営 (Psychotherapeutic Class Management)	小学校	教師	教育社会学(専門) 臨床心理学
③スクールカウンセラーとして 学校内でのカウンセリング	中学・高等学 校	スクールカ ウンセラー	臨床心理学(専門) 教育社会学

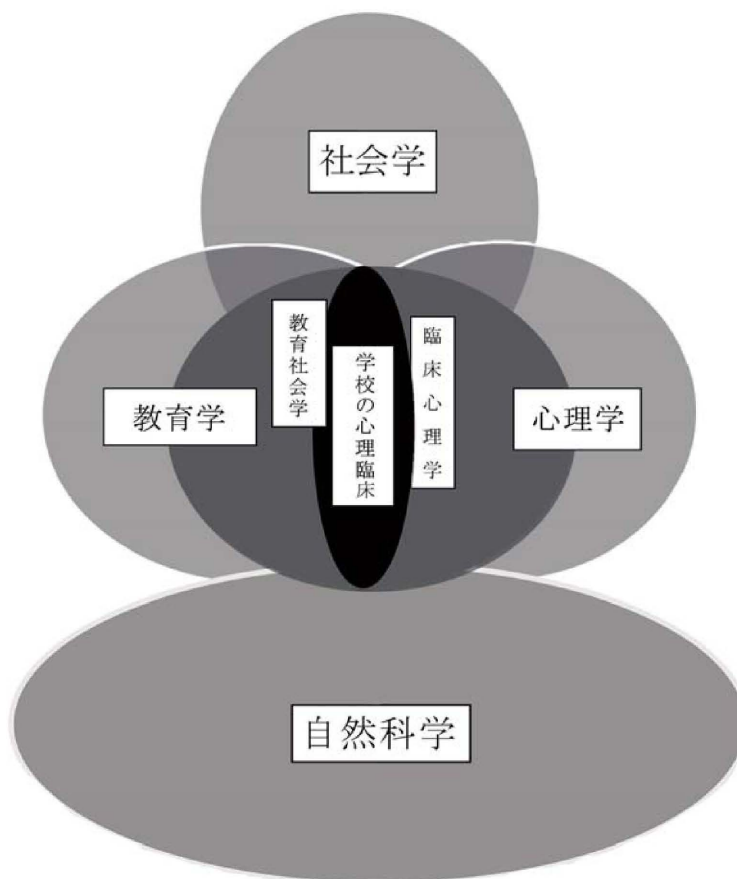


図 1 「学校の心理臨床」の領域

「学校の心理臨床」は教育社会学と臨床心理学の境界領域での研究であるといえるだろう。「学校」は従来、教育学の領域だったが、近年は、PTA による活動や地域社会とのつながりが強くなっていることから、教育社会学の領域に広がっている。

図1に示したように、筆者は、「学校の心理臨床」という臨床心理学と教育社会学の境界領域を含んだところの実践研究をしてきたことになる。徳永（1989）は、人間科学の研究は数個の比較的近い専門領域に属する研究者が、特定の問題について随時プロジェクトチームを組むことが望ましいと述べている。本研究では、プロジェクトチームを組むこととほぼ同様のことが、筆者個人の内面でなされることになったのである。

①教育研究所での心理臨床

教育研究所は、臨床心理学を専門にしているが、教育社会学との境界領域を含む学際的研究現場とみることができよう。

公立の相談機関である教育研究所では、地域に住んでいる、幼児期から青年期の心理的問題を抱えたクライアントに対してカウンセリングやプレイセラピーを行い、親のカウンセリングも行っていた。相談内容は、子どもの性格・情緒・行動など、不登校・親子関係などの心理的・発達的な問題など多岐にわたっていた。

筆者は、心理療法の専門的技法として、思春期以降の成人に対するカウンセリングでは、ユングの分析心理学とロジャーズのクライアント中心療法をベースに、箱庭療法や描画療法を取り入れた心理療法を、子どもに対してはプレイセラピーを実践していた。

面接形態は、母子並行面接、ケースによっては保護者だけ、必要に応じて学校や関係機関とのカンファレンス、心理検査なども行っていた。1回で終結の場合もあるが、ほとんどは継続してのカウンセリング、プレイセラピーであった。このような相談機関での業務の流れは、まず、いわゆる身体症状や病気以外の心理的・発達的問題で保護者が申し込むのである。初回面接では、子どもの状態を見極め、保護者の心配や不安の程度、子どもの問題に向き合う力等も見ながら、保護者と一緒に問題を整理していく。家族関係、人間関係や周りの環境などにも注目する。その後、継続面接になり、プレイセラピーやカウンセリングで子どもに働きかけていくことが必要なケースが多いが、保護者の子どもへの対応の変化や学校での配慮などで問題がよくなるケースもある。教育研究所に通うと、子ども自身や保護者がセラピストと一緒に問題に向き合うことで問題が解決・軽減したり、自分でやっていく力がついて終了する。紙数の関係で事例の詳細については、大前（1981, 1982, 1985, 1987）を参照されることをお勧めする。

②心理療法の視点を取り入れた学級経営（Psychotherapeutic Class Management）

これは、学校という教育社会学の領域に臨床心理学との境界領域を含む学際的研究である。

筆者は、今はまた心理臨床の世界に戻っているが、臨床心理士でありながら小学校の教師をしていたことがあった。当時、教育研究所のカウンセラーから小学校の教師として転勤をすることになったのであるが、同じ教育委員会の中での転勤とはいえ、全く違う職種になった、という印象だった。例えば、1対1で個人を大切に臨床心理士の

態度は、学級全体を相手にする教師の立場では同じようには役に立たなかった。学級全体を集団として見る視点も必要なのである。

学校教育では「個を大切にし、個を育てる教育」が叫ばれている。けれども実際には、一度に 20～40 人の子どもに対して授業を行う。教師は教科を教えることに目が向き、子どもを集団として動かしたり、扱ったりすることはうまくできるが、個々の子どもの心の問題に対しては、これまであまり目が向けられていなかったように思われる。心理療法をそのままの形で学校教育のなかに取り入れることはできないが、教師が個々の子どもの心の問題を扱うことに目を向ける方法として、学級経営の一環に心理療法の視点を取り入れてみるのはどうであろうか。不登校・いじめ・ひきこもりなどの増加をみるに、今の教育を補うものとして、個々の心を育てる視点も重要だと考えられるからである。

「心理療法の視点を取り入れた学級経営」というのは、集団に焦点を当てた従来の学級経営に加えて、個人を扱う心理療法の技法を取り入れる方法である。学級成員の各々を育てることに焦点を当て学級成員が成長することで、学級集団自体も成長させようとする試みである。これは総合的な意味での人間科学的アプローチである。

「心理療法の視点を取り入れた学級経営」の方法は、臨床心理学の視点として、クライエント中心療法に基づいて教師が話を聴くことで子どもたちのコミュニケーション力を育むこと、および子どもたちの心の発達を促す芸術療法的アプローチとを学級経営に導入するのである。

芸術療法的アプローチは、個々の子どもの精神内界を自由に表現できるように、風景構成法、元型イメージ画、自由画を授業に取り入れた。描画によるアプローチは個々の心を癒し、学校ストレスを減少し、個々の心の成長を促し、それにともなって学級というグループ自体も成長させると思われた。

「心理療法の視点を取り入れた学級経営」の筆者のイメージは個人対象のプレイセラピーの流れを教室でグループを対象にしているイメージであり、芸術療法的アプローチは構成的グループ・エンカウンターの中でのエクササイズに近いものである。また別の見方をすれば、教師をセラピスト、学級というグループ全体をクライエントとして捉え、学級風土の中での病理に心理療法を導入するというイメージも成り立つであろう。そのような中で、子どもの各個人が癒され、学校ストレスが低減されることになると、子ども同士の人間関係が親密になり互いに話せるようになる。そうすると子どもたちの心の成長が促され学校生活が楽しくなり活性化されると思われるのである。事例の詳細については、「学校の心理臨床」（1999）の筆者の担当部分を参照されることをお勧めする。

③スクールカウンセラー

これは、臨床心理学と教育社会学との接点の境界領域を含む総合的な学際的研究領域での臨床心理学実践である。

スクールカウンセラーの仕事の中身は教育研究所でのカウンセリングとあまり変わらない。大きな違いは、仕事をする場所である。スクールカウンセラーは学校の中の相

談室で面接し、教育研究所の場合は学校の外の施設での面接となる。

臨床心理学的アプローチをする教員とスクールカウンセラーとの違いは前者の場合は、教員である筆者の心の中の世界で一人二役という感じで、臨床心理士と教員との連携をとっていたが、後者の場合は、筆者はスクールカウンセラーという役割で、現実の世界（心の外の世界）の教員と連携をとるという点で違っていた。

スクールカウンセラーの支援の流れとして、来談の経路は、生徒本人や保護者が直接申し込みをする場合もあるが、担任や学年主任や養護教諭など本人に関わりのある教員からの薦めで本人や保護者が来談したり、教員だけの相談という場合もある。

その場合のスクールカウンセラーの支援のポイントは、生徒本人への直接的支援はカウンセリングや心理教育となる。保護者への直接的支援はコンサルテーション（現実面での指導・助言）や親のカウンセリング、教員に対してはチーム支援やコンサルテーションとなる。

スクールカウンセラーの役割は、保護者や教師など関係者がよりよい関係性を児童に対してつくれるような支援を心がけ、専門的な視座から教師にアドバイスをしたり、子どもの作品を解釈したりするような臨床心理学的支援を心がける。

カウンセリングの場が学校にあるメリットは、実態把握・関係者からの情報収集ができやすいことである。担任など学校関係者からは、学校での学習や生活、人間関係について、保護者から家庭内での生活や人間関係や性格、行動を聞き取ることができる。

それにより、児童・生徒本人だけでなく、関係者からの情報収集による多面的なアセスメントができることである。また、児童・生徒対応についての教師へ直接心理的支援をすることができやすい。それにより不登校・いじめなど未然防止・早期発見・早期対応が可能になるだろう。また、周囲の児童・生徒への配慮、理解や協力体制の要請もしやすい。さらに、校内の支援教育（指導力）を高め、担任などの個人でなくチームで対応することの理解も得やすくなるだろう。

学校におけるスクールカウンセラーの役割は、子どもの生涯を見据えた見守り手として、教員の支え手として、保護者の支え手として、学校教育の場で、心理的問題を抱える子どもたちに寄り添い、彼らが理解されるように周囲との橋渡しに努め、2次障害をできるだけ少なくして成長を促進し、成熟を待つことができるように臨床心理学的支援をしていくことである。

Ⅲ．考察

1. 個と集団

3通りのケースに対して「個と集団」という観点から考察する。

まず、教師からみた「個と集団」は、個を育てることによって集団も育つことを目指すというものである。

学級集団の変容とその成員個人の心の発達を促すために、「総合的な」・「間をつなぐ」という意味での人間科学的アプローチとして学校現場における臨床心理学的アプローチは有効だと思われる。

青木（1992）は「従来の個別科学のレベルをアウフヘーベンしたところがないと人間科学にならない。」と述べている。「アウフヘーベン *aufheben*（止揚）」とは広辞苑によると「ヘーゲルの用語。弁証法的発展では、事象は低い段階の否定を通じて高い段階へ進むが、高い段階のうちに低い段階の実質が保存されること。」となっている。「個」に重点を置いた学問である臨床心理学と「集団」に重点を置いた学問である教育社会学が「アウフヘーベン」するところは人間科学的学問空間といえるだろう。学校現場では、臨床心理学的アプローチによる個人の内的過程の変化をより高い段階で生かすことが学級集団の変化を促すものとしてみることもできるだろう。

次に、臨床心理士からみた「個と集団」について述べる。

個人臨床と集団臨床は深いところのベースは共通で、現実的なところでは相補い合う関係になることが望ましいと思われる。

個人をどのように集団の中で存在させるかについて、学級集団とスクールカウンセラー（以下 SC と略す）との関わりについて考えてみる。例えば、不登校で教室には入れないけれど、SC のカウンセリングのときにだけは学校へ通える場合である。カウンセリングがうまく展開して本人に教室に入る意欲が出てきたときに、受け入れ側の学級集団の態勢を整えなければならない。SC の側からすると、クライアントを学級という集団の場に返すこととなるのである。この時に、受け入れ側の学級集団がうまく機能するとクライアントは順調に回復しやすくなるだろう。逆の場合は、なかなか学級に入れられないまま卒業することもある。クライアントが学級に戻ることがうまくできることは、将来的にクライアントが適切な形で社会で生きていけることにつながるだろう。このような場合、教師には子どもたちを生かすための学級経営力（マネジメント力）が必要になる。臨床心理士がクライアントを生かすように、教師が学級の子どもたちを生かすことができ、子どもたち各々の能力が発揮できると、学級という集団も活性化し、集団臨床の場として機能するようになると考えられる。これは、SC だけに限らず、教育研究所など外部相談機関の臨床心理士と学級との間でも似たようなことが起こる。

学級に問題を抱えた子がいる場合に、その子に対する教師との 1 対 1 の取り組みは重要である。同時に、その子を取り巻く学級の子どもたちが治療促進的に動くように、教師が支援していく視点も必要なのではないかと思う。そのためには、子どもたち集団が育つことが重要であり、教師は育ち合い認め合いの学級作りをすることが必要となる。これからは、臨床心理学的視点を持った教師の養成も必要になってくるものと思われる。

2. 人間科学の方法と仮説の検証

人間科学の方法は、多元的である。本研究の領域は臨床心理学と教育社会学を中心に

心理学，教育学，社会学，精神医学など自然科学との接点も持ちながら多元的なアプローチがなされたものである。徳永（1989）は「同一の領域も複数の接近を許す人間科学に関する『方法的多元論』をとりたい」としている。糸魚川（1992）は人間科学における研究の方法の特性は「見えないところを見ようとしたり，今まで考えなかったようなことを考える。」そして，「人間科学の方法はその人が持っている興味や立場の幅からいうと多元論。」としている。金子（1992）も，「人間科学の方法論は多元論でしかありえない。それは人間の存在というものが多元的である。それを統一する方法が今日まだ確立されていないので当面多元論。その中でも科学的な考え方からすると一番新しい教育学はいろんな方法を活用せざるえない状況にある。」としている。

仮説の検証について，直井（1992）は，「広い意味で検定のない知識を人間科学として認めてよろしいかということが問題になる。」としている。中島（1992）は「理論というものがコンセプトやアイデアを持つことに本当に自由であるならば場合によっては厳密な意味での検定のしような内容も生じるかもしれない。その場合人間科学から切り捨てていくのか？人間科学が多元的方法で攻めていくならば『実験』に対するような厳密な検定法以外のもっと広い検定のやり方が考えられねばならない。」と言う。直井（1992）の「検定」という問題に対して，糸魚川（1992）は「生物の『淘汰』の理論や進化の理論と統計学の『検定』との接点がどこにあるのかと考える。」としている。例えば，「人間の個と集団，人間社会の変遷の説明」については，直井（1992）は「グローバルな長期的な社会進化論的な問題に関しては検証はなかなかむずかしい。」としている。教育学のような人を変える研究場面で検証可能性について，金子（1992）は「仮説から検証に至るプロセスは研究の基本的な要件。検証できない領域については歴史の中で検証している。歴史的な一定の時期を取り扱うことによって検証したり，追跡的に検証したり，継続的に出かけて行って検証し理論を構成していこうとしている。」

臨床心理学の場合も教育学と似たような検証の方法として事例研究がある。それによって，子どもが心理的に成長・発達し，心理的問題が解決していく過程が検証されることになる。「学校の心理臨床」における事例研究も，心理的問題の解決や成長・発達のプロセスを詳細に記載した。

IV. おわりに

本論では，筆者の経験した学校教育の中での臨床心理学的アプローチは人間科学的アプローチであることがわかった。

筆者は，今日までさまざまな子どもたちとその親たちに出会った。人と出会うスタイルは一見違うが，教師の場合も臨床心理士の場合も筆者の中では人と出会う基本的なものはいずれの場合も共通だったように思う。教師の立場であっても「心を育てるためにはどうすればいいのか」について考えていた。

「元祖人間科学部」の1期生として育った筆者にとって、教師と臨床心理士の両方をすることにあまり抵抗がなかった。むしろ、両方を深く体験し、心を育てることを総合的に捉える事の方に興味があり、しぜんと人間科学的アプローチを実践することになったように思う。

私は、これからも、先人たちが述べているように「人間科学とは何か」という問いかけを続けながら、人間の幸せを目指す人間科学的アプローチを追求していくつもりである。

V. 参考・引用文献

- Allan, J. 1988 *Inscapes of the child's world: Jungian counseling in schools and clinics.* (阿部秀雄 監訳 1990 「描画から箱庭まで—ユング派による子どもの心理療法—」学苑社).
- 青木保 1992 座談会「人間科学とは何か」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- 東山紘久 1991 これからの学校カウンセリングと学校カウンセリングの問題. ミネルヴァ書房.
- 糸魚川直祐 1992 座談会「人間科学の方法」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- Jean Piaget 1970 ; *The Place of the science of man in the system of science.* 波多野訳「人間科学序説」1976. 岩波書店
- 金子照基 1992 座談会「人間科学の方法」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- 河合隼雄 1995 臨床教育学入門. 岩波書店.
- 直井優 1992 座談会「人間科学の方法」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- 中島義明 1992 座談会「人間科学の方法」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- 大前玲子 1976 両親と子どもの認知構造についての研究. 大阪大学人間科学部卒業論文
- 大前玲子 1981 ある女兒の遊戯治療過程より 豊中市立教育研究所研究紀要, 51, 1-18.
- 大前玲子 1982 登園を嫌がるU君 豊中市立教育研究所研究紀要, 55, 18-25
- 大前玲子 1985 「ある女兒の箱庭表現とその治療過程についての一考察」豊中市立教育研究所研究紀要, 59, 30-42.
- 大前玲子 1987 「ある登校拒否児の箱庭表現と治療過程」豊中市立教育研究所研究紀要, 68, 28-45.
- 大前玲子 1999 「小学校での事例：心理療法的視点を取り入れた学級経営」河合隼雄他 総監修「学校の心理臨床」金子書房 P226-238.
- 大前玲子 2009 「学級というグループ—心理療法の視点を取り入れた学級経営—」特集 グループの現在 臨床心理学第9巻6号 P757-P762 金剛出版
- 大前玲子 2010 「学校現場における子どもたちが示す未病のサイン」日本未病システム学会雑誌 vol.16 No.1 2010 P109-112
- 大前玲子 2010 箱庭による認知物語療法. 誠信書房

- Rogers,C.R. 1969 Freedom to Learn(友田不二男編 1972 ロジャーズ全集別巻4 創造への教育(上) 岩崎学術出版社).
- Saint-Simon;M'emoire sur la science de l'homme.1813 森博訳:「サン・シモン著作集」第二巻 恒星社厚生閣 1987
- S.Strasser;Phänomenologie und Erfahrungswissenschaft vom Menschen 1962. 徳永・加藤訳「人間科学の理念」新旺社 1978.
- 徳永恂 1989 「人間科学とは何だろうか」大阪大学人間科学部紀要第15巻, p1-p21
- 徳永恂他 1992 座談会「人間科学の方法」中島・井上・友田編「人間科学への招待」有斐閣
- 山中康裕編著 1984 「中井久夫著作集(別巻)風景構成法」岩崎学術出版社.

What is the Human Science Approach?

Reiko OHMAE

The “human science approach” can be thought of as a distinct academic discipline discovering a new type of academic space from a comprehensive, bridging, and interdisciplinary perspective.

Human science dates back to the 1950s France, where the term *sciences humaines* merged and spread as a general name for a group of academic disciplines that attempted to provide a holistic explanation of human beings as emotional beings.

In 1972, a Human Sciences school was founded at Osaka University for the first time in Japan. In order to be able to respond to the demands of diverse issues confronting human beings, this school was not bound by preexisting academic fields, but had as its philosophies an *interdisciplinary nature*, the *integration of the humanities and science*, and a *holistic understanding of human beings* when it set itself apart from psychology, sociology, and pedagogy to create a new academic space.

The purpose of this paper is to describe *clinical psychology at schools* as practical examples of the human science approach, as well as to show that they bridge individual academic disciplines and have a comprehensive perspective while placing particular emphasis on their interdisciplinary nature.

Clinical psychology at schools refers to the clinical psychological approach that the author has experienced in schools and educational research centers, the front lines of education.

It is research that merges educational sociology and clinical psychology.

The three actual cases of *clinical psychology at schools* experienced by the author are as follows:

The first case, *clinical psychology at educational research centers*, concerns counseling and other forms of clinical psychology work conducted when the author worked as a counselor at a public educational research center for over a decade.

The second case, *psychotherapeutic class management*, is a practical example of clinical psychological approach in education that was adopted when the author worked as a teacher at an elementary school for more than ten years.

The third case, *school counselor*, is concerning the efforts made by the author made as a school counselor at junior and senior high schools.

The clinical psychological approach in schools seems to be effective in enhancing the transformation of class groups and the mental development of class members when these three cases are seen from both individual and group perspectives. The area of clinical psychology that focuses on the individual, and educational sociology, with a focus on the group, *aufheben*, may be together called the academic space of human science. A change in the internal processes of an

individual that are brought about through counseling may be seen to *aufheben* the change in the classroom group. In other words, it is an effort to nature the development of the classroom by the development of each and every class member.

In conclusion, *education at school* and the *clinical psychological approach* have traditionally belonged in the territory of separate academic schools. However, a little has been done to practice both these fields together. Therefore, it the author, a member of the first graduating class of the “Original School of Human Sciences,” did not hesitate from practicing these fields together. In fact, the author was interested in understanding different aspects comprehensively and thus, has naturally practiced a human science approach.

The author hopes to continue the pursuit of the human science approach that aims to achieve human happiness, by asking the question, “What is human science? ”